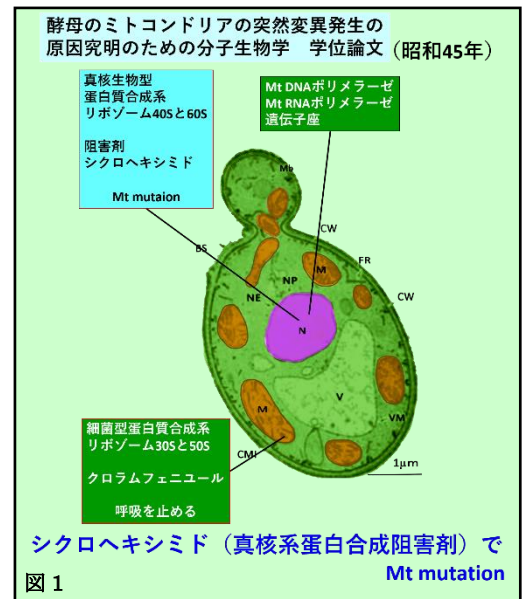


## はじめに

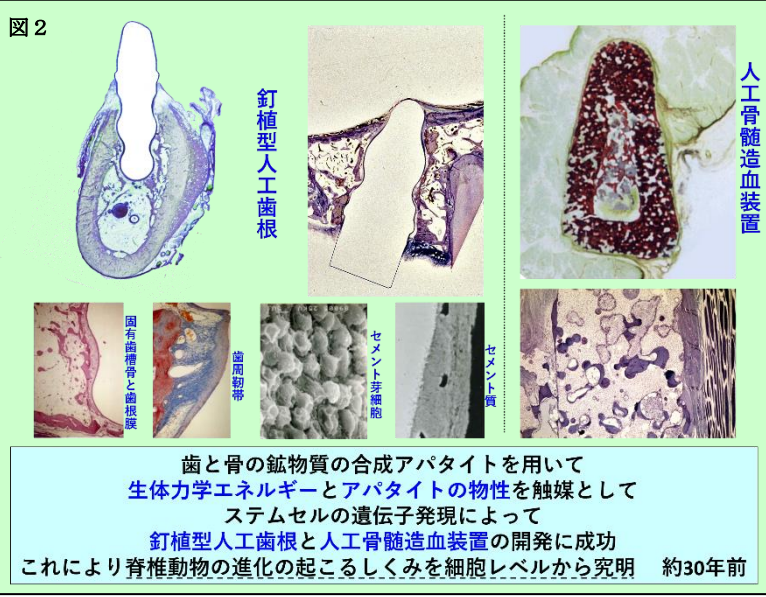
### おもしろ学問人生 51 年の歩み — 新著「生命記憶を探る旅」出版によせて

大学を卒業したのが昭和40年（1965年）ですから、その後の臨床と基礎医学研究はすでに51年間も続けたことになります。大学院で最初にはじめた学位論文の研究が、酵母を用いて行った「ミトコンドリアの突然変異の発生の原因究明のための分子生物学研究」です。昭和45年に発表しました（図1）。この研究がのちの現代医学の盲点と重大な見落としに気づいた契機となっていますので、これについても後で簡潔に述べましょう。元々歯と顎と口腔を専門とする内臓頭蓋の医学は、脊椎動物を定義する歯と骨を中心とする医学であるために、この領域の学問は進化学と深く関わりのある分野です。学生の頃から歯と骨の鉱物質が人工的に合成されれば、この物を用いて進化の推進力となるエネルギーがどんなものかを探ることが出来ると確信しているところがありました。進化が骨の鉱物質の物性の刺激作用と、何らかのエネルギーという二つの触媒の働きによって起こっているに違いないと考えておりましたので、とりあえず生命エネルギー産生の元となるミトコンドリアを研究したいと考えました。

特にミトコンドリアの機能と深く関わるはずの突然変異発生のしくみについて研究し、ミトコンドリア DNA、RNA、蛋白質合成等に関する分子生物学研究を行って突然変異発生の原因を究明して、これを論文にまとめて学位を受けました。歯と骨の鉱物質のアパタイトが合成され実用化された段階で、昭和61年頃から哺乳動物に特徴的な釘植歯を、アパタイトを用いて開発研究をはじめました。成犬を用いた動物実験では、適度な咀嚼・咬合力を工夫して負荷することにより、セメント芽細胞と歯周靭帯の線維関節と固有歯槽骨を誘導することに成功。続いてアパタイト多孔体からなる人工骨髄造血チャンバー（装置）を開発し、成犬の常時動く筋肉部位にこれを埋入し骨髄造血巣を誘導することにも成功しました。この二つの人工骨格器官の開発研究の成功により、進化が生体力学エネルギー（流体力学に共役して生ずる流動電位）とアパタイトの物性効果の二つが触媒としてステムセルに作用して遺伝子の引き金を引く遺伝子発現によることを明らかにしました。これにより進化が流動電位とアパタイトの物性効果



の二つの作用で起こる現象であることを細胞レベルで検証しました(図2)。進化の起こるしくみを究明して一段落ついたところでこれまでの成果をまとめて「顔の科学」を1996年に出版しました。この時に現代医学にいかにか生体力学や重力エネルギー、ミトコンドリアのエネルギー代謝や遺伝子発現や流体力学、流動



電位等の考えが抜け落ちていたことが明らかとなりました。こうして現代医学と生命科学には重大な見落としと盲点のあることに気づいて、これらの視点に着目して研究をはじめたのが28年前のことです。この度漸くここにこれらの事項についてまとめることが出来ましたが、この過程で今日の医学と生命科学の考え方に大きな欠陥のあることが、さらに明確になりましたので、ここでそれについても述べておきます。

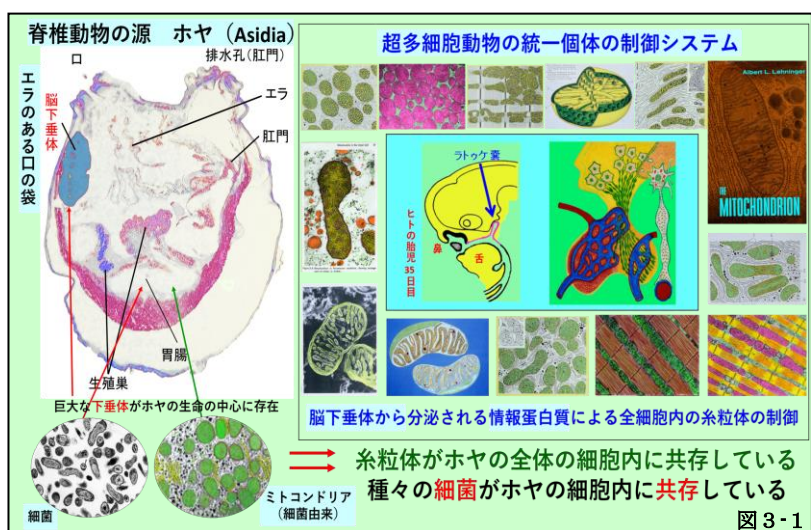
まず現代医学と生命科学の盲点と見落としとは何かを深く考えましょう。今まさに未解決で困っている重大テーマが何であるか？すら解らないことが最大の盲点で、同様に何を見落としているのかすら解らないで、漫然と研究が旧来の手法で続けられていたこともまた大きな問題です。ここで盲点を整理すれば三つの未解決問題 (I)

(I) (triple unsolved issues)

と三つの見落とし問題 (II)

(II) (triple overlooked issues)

があるのです。そして進化の推進力が明らかとなれば(III)として発展的進化と絶滅に向かう進化があることも至極当然のことと解ります。以下これらの三点について述べます。





(I) 三つの未解決問題 I (triple unsolved issues)

(I) の第一は、超多細胞・多臓器から成る哺乳動物の統一個体としての制御のしくみを究明すること。これ無くして、わけの解らない難治性の疾患や脊椎動物の進化のしくみは解るはずがないのです。これは第二の未解決問題である難治性疾患の本態の究明と根治療法の開発研究を通してはじめて以下のように明らかにすることが出来たのです。すなわち多細胞・多臓器から成る動物の統一個体の制御のしくみは、脳下垂体の情報蛋白質による全身性の細胞内ミトコンドリアの制御系によることを疾患の治療を通して究明しました。筆者はこれをすでに Biogenic Amines (2006) Vol, 20 : P171-184 と Journal of Biological Physics and Chemistry (2011) Vol, 11 : P63-P85 に発表しています。

(図 3-1、図 3-2)

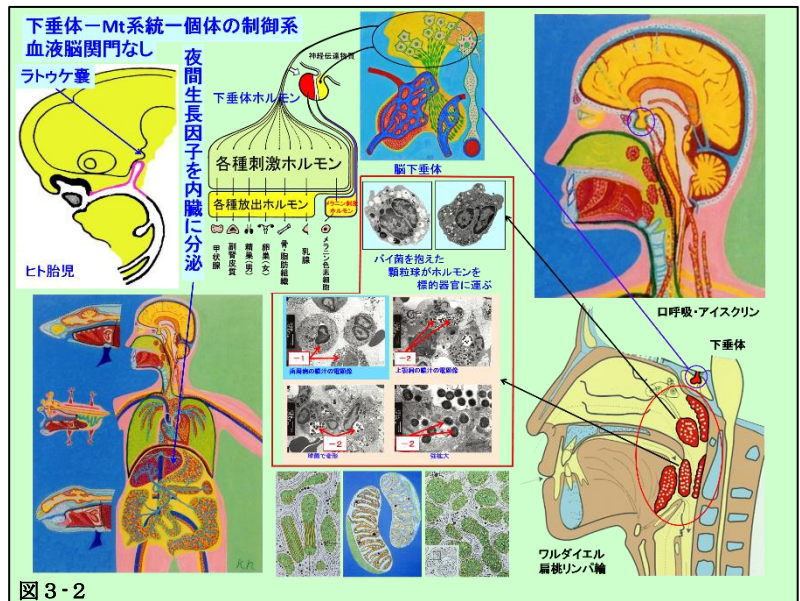


図 3-2

第二は三大難治性疾患である免疫病と悪性腫瘍と精神神経疾患 (統合失調症、そううつ病、ノイローゼ、認知症、てんかん、パニック症、摂食障害、発達障害を含む) 発症の原因解明と治療法の究明です。筆者はこれ等についてもすべて明

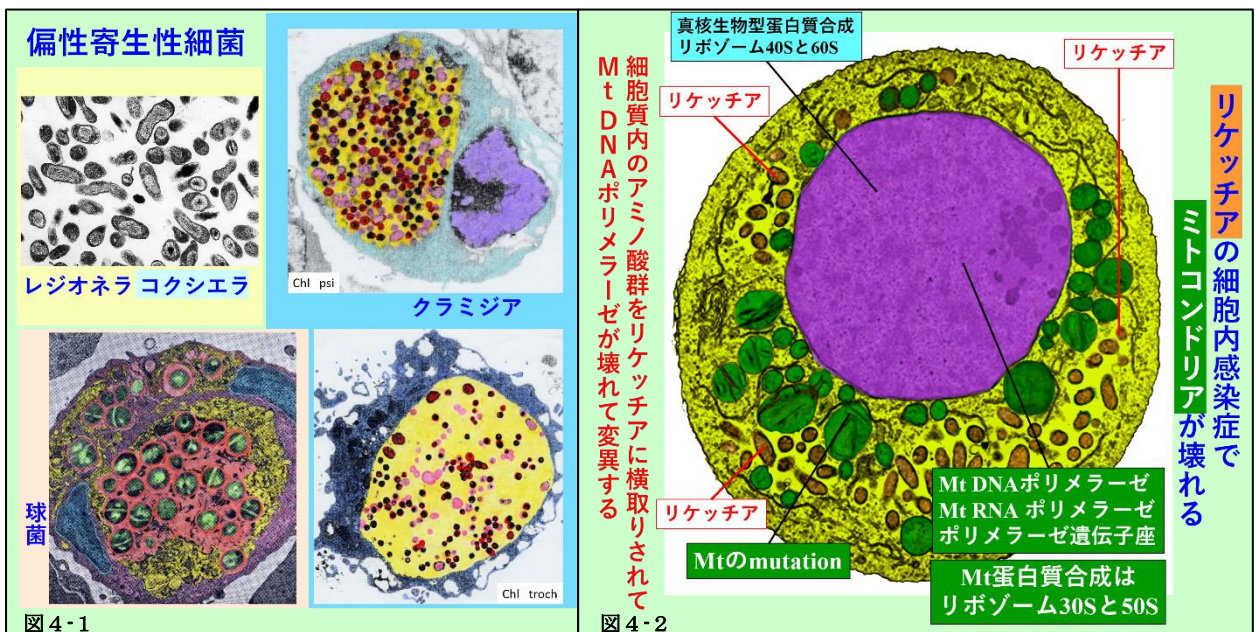


図 4-1

図 4-2

らかにし、国際英文誌の Biogenic Amines (2007) Vol,21:P23-41, (2008) Vol,22:P75-84, (2009) Vol,23-2:P53-74, (2009) Vol,23-4:P253-273, に発表し、Journal of Biological Physics and Chemistry (2010) Vol,10:P135-144,と(2011) Vol,11:P63-85, (2012) Vol,12:P11-18 に発表しました。これらは昔**日和見感染症**と呼ばれた常在性の腸内微生物の細胞内感染症によるミトコンドリアの荒廃による疾病です。(図 4-1、図 4-2)

(I)の第三は脊椎動物の進化の**起こるしくみと推進力を究明すること**。動物は動くことを特徴としているから、進化は環境因子、すなわち重力をはじめとする多種多様なエネルギーと酸素やグルコース、水や空気等の物理化学的刺激のほか、動物の常習的動き(重力作用の包含された生体力学=真性用不用の法則)(ラマルク・ニシハラ)のもとに起こることを究明することです。この**進化のしくみ**を考えた時に病原性の有無にかかわらず**微生物因子を環境因子**の中に含めれば、伝染病や感染症のみならずわけのわからない三大難治性疾患も、特殊な癌症例(火傷や発癌物質による)を除いてすべては自分の腸内に共存する常在性微生物の**細胞内感染症**によるものであるから免疫システムの問題としてではなくて、進化の問題すなわち退行進化の問題に含まれることとなるのです。つまりこれらの難治性の三大疾患は絶滅に向かう退行進化の一里塚ということになります。

## (II) 三つの見落としの問題

さて、(II)の**三つの見落とし問題**についての第一は、すべての**多細胞の脊椎動物**は、全く認識することなしに**万有引力(重力エネルギー)の摂理**のもとに生きているということが完璧に見落とされています。陸上の高等動物は地球の重力 1 g のもとで、一定のスピードで体を駆動すると、その体のつくりが細胞のリモデリングのためにほんの少しずつ変わってしまうのです。しかし微生物である原核生物や原生動物のごとき小生命体とリモデリングのシステムのない無生物物体は、どんなにハイスピードで動かして移動させても重力作用を受けることはありませんが、これは一体何故でしょうか?これをまず深く考えて下さい。

(II)の第二番目の見落としは、いわゆる**エネルギー全般**についての**完全失念**です。すなわち**環境エネルギー**と、その中に重力が組み込まれている**生体力学(バイオメカニクス)エネルギー**、および生命体内の小生命体である**ミトコンドリアのエネルギー代謝**の三大エネルギーが**完璧にど忘れ**されています。すべての生命活動は、ミトコンドリアのエネルギー代謝が細胞内で支えており、これによりすべての動物の動きや行動がバイオメカニクスのもとに制御されています。細胞のリモデリングのみならずミトコンドリアのエネルギー代謝にもなった流

動電位、血圧、生体力学エネルギーと栄養、酸素、ミネラル等の物理化学的刺激が触媒となって遺伝子発現が起こる遺伝現象が完璧に忘れられています。

(II)の第三の見落としは病原微生物のみならず、動物の体に共生している常在性の微生物群、つまり常在性の腸内の病原性のない微生物群の日和見感染症が完璧に失念されているのです。これらの微生物は、口呼吸常習者かアイスクリンを常食すると様々な器官や組織内、細胞内、すなわち脳のニューロン内、肝細胞内、膵臓のランゲルハンス島細胞内に細胞内感染症を発症し、皮下組織細胞内、骨髄造血巣細胞内、腸粘膜上皮細胞内、肺胞の上皮細胞内に共生するのです。その結果細胞内のミトコンドリアが壊れて働かなくなり、細胞に特徴的な働きが荒廃します (JBPC, 2011)。これら三つの見落としの考えを、先に述べた三つの未解決問題に重ね合わせれば自然にこれらの問題は究明されるのです。

かくして我々は、脊椎動物の進化という現象が、エネルギーのみならず質量のある物質の物理化学的刺激により、つまりこれら両者が触媒となって未分化間葉細胞の遺伝子の引き金を引いて起こるということをはじめて知るのでした。

このように現代医学と生命科学の盲点を認識しただけで、今日のこの生命科学と医学業界がいかにかへなへなかがわかります。

まず動物生命体の基本単位は細胞ではなくて、細胞内に数千も存在するミトコンドリアなのです。これ迄の形態学の研究は、病理学も含めて全て死んだ細胞や組織をその対象としていました。そして生きた細胞や組織を対象とする生理学の花形の分子生物学は、その根本において、微小の世界の生き物と多細胞動物との根本的な違いを完璧に見落とししているために、どんなに既存の研究を蓄積しても何事も究明できないのです。

こんな事も知らないで、進化や免疫のしくみを、生きている動物の最大の特徴である生体力学エネルギーと重力エネルギーを完璧に無視したうえに、あれやこれやと考えて来たのがこれ迄のこの業界のやり方でした。これは宇宙空間における地球上において「動物が生きる」ことの真の意味を、この学問にたずさわる科学者たちが全く体得していないために起こった希有の現象なのです。筆者はこのことをかれこれ20年以上も声を大にして叫び続けて来ましたが、完璧に無視されているのです。

### (III) 新しい医学の誕生と発展的進化および退行進化と絶滅進化

さて現代生命科学の三つの見落としと三つの未解決問題とを重ね合わせると現代医学の欠陥が浮かび上がって来ます。すべての生命体に関するエネルギーに着目し、細胞内小器官のミトコンドリアのエネルギー産生を中心として重



力作用の組み込まれた生体力学に目醒め、環境中や食物中に生棲するすべての微生物と、生体内に共存共生している微生物に着目し、生命細胞との共棲や細胞内感染症を認識しさえすれば、従来の医学が動物細胞の外の血液リンパ液の変化のみを観察して来たことがわかります。難病の本態が主に偏性寄生性の細菌と低体温による腸内常在菌の細胞内感染症であることがわかれば、従来の器官と細胞レベルから行う病気を診断する細胞病理学から、エネルギーと量子物理学に立脚した細胞内のミトコンドリア病理学へと脱皮しなくてはなりません。

従来の光学顕微鏡レベルの病理画像診断から、**電子顕微鏡 (TEM) 画像とニューロン・ミトコンドリア共鳴診断術**とを組み合わせた**新しい医学すなわち Energy-based Quantum Medicine**を樹立する必要があります (図5)。

これからの健康法は細胞内感染症を予防し、常時ミトコンドリアが健康状態を維持できるように環境を整え摂食法と咀嚼法を正し、生活の行動習慣を整えることが肝要です。

動物 (ヒト) が地球で生きるということは、悠久に流れる時間と未来永劫に続く空間と、そこに備わっている重力と環境エネルギーと食物と酸素のすべてを個体が占有することが必須の条件です。生命体が生き永らえるだけで、時々刻々とこれら5つのエ

ッセンスを消費して変容しつつ、生殖して生命を次代につなげているのです。これで漸くにして20世紀、21世紀の今日迄混迷を続けていた医学と生命科学の最後の難問の砦として残った、わが人類を含む**脊椎動物哺乳類の進化の法則と三大難治性疾患の謎が完璧に究明され、迷走と混迷を極めた迷宮の免疫学も、はたまた対組織免疫系の免疫寛容の謎も対微生物免疫系の免疫寛容の謎も下等な原始脊椎 (冷血) 動物と高等な恒温動物とのしくみとを比較研究しただけで、重力が組み込まれた生体力学エネルギーのもとに難なく究明されました。**

難治性の三大疾患はただの常在性の腸内 (口腔・鼻腔・泌尿生殖器を含む) 微生物の日和見感染症すなわち細胞内感染症が高じただけの病気でした。これらの疾患で世界中の文明国の人々が塗炭の苦しみを味わうことになったのは、昔



はれっきとして存在していた日和見感染症と自家中毒症（小児）という病気を完璧に葬り去って、すべてはストレスか原因不明のアレルギーによるとしたケンダル等（図6）の浅はかな研究に対してノーベル医学賞を授与したことはじまります。それまで真面目な医師が様々な工夫をして病気を治すこ



とに力を尽くしていた西洋医学が、これで完璧に症状だけを一時解消して、あとはごまかす治せない西洋医学に代わってしまったのです。これがはじまってもうすでに65年も過ぎました。病気を死ぬまで長引かせるために、このノーベル賞の一件を利用した一部の医師が声高に唱えたのが「抗生物質や抗ウイルス剤が毒だ」という見解です。こうして今治せない西洋医学が完全に完成してすでに30年が経過しています。

世界で特段に悪い医療、すなわち治せない全滅医療が最も進んでいるのがわが日本です。小児科が全滅で免疫病科も腫瘍科も精神科も全滅です。わが国の医療がはちゃめちゃになったのは昭和47年からです。これは田中角栄が首相の時に社会党・共産党の唱えていた難病医療救済制度を大型病院を育成するために横取りして、多大な国税を投入したためです。当時潰瘍性大腸炎が出はじめて（日立の冷蔵庫の-20℃の氷のせい）難病に指定されると、一気にこの病気が50倍に増えたのです。この制度のおかげで私立医科大学病院は驚くばかりに大発展したのです。

こうして治さないけど死なさない難病が国民の間に増え続けているのです。私はこの制度を「生かさぬよう死なさぬよう」医療と呼んでいます。

幸いなことに私は、現代医学の三つの未解決問題と三つの見落としを過不足なく重ね合わせて、進化の謎と難治性疾患発症の謎を生体力学と流動電位とミトコンドリアのエネルギー代謝、および物質の触媒作用によるステムセルの遺伝子発現で起こる現象として究明しました。重力進化学に目覚めるとともに重力と生体力学を制御しつつ、発展的な健康生活を目指し、平和で落ち着いた穏やかな人間社会を目指しましょう。おもしろ学問人生も大成果のもとに夢の未来医学へと進んで行きそうな気配です。